Discussion Paper No.142 JUL 2022

戦争とツアー

―観光旅行から徒歩錬成へ―

笠井雅直

名古屋学院大学総合研究所

University Research Institute
Nagoya Gakuin University
Nagoya, Aichi, Japan

戦争とツアー
―観光旅行から徒歩錬成へ―

笠井雅直

目次

はじめに
一、日中戦争以前の観光旅行
二、日中戦争後の観光旅行
三、旅行の制限と徒歩錬成
四、戦後のアメリカ駐留軍向けの観光案内

はじめに

拙稿「修学旅行の史的検討―行軍・学修から観光・学修へ―」(『名古屋学院大学論集〈医学・健康科学・スポーツ科学篇〉』第１０巻第１号、２０２２年）において、戦前戦後における日本の修学旅行が行軍・学修から観光・学修へと転換したことを明らかにした。その際、修学旅行地としての愛知・名古屋は、滋賀県の彦根中学校の修学旅行先として、一般的であったこと、あるいは東京方面への修学旅行見学地の一つとして組み込まれていたのに対して、戦後は、全国統計によるものとはいえ、愛知の「名古屋・熱田・瀬戸・犬山・日本ライン」として区分されたものは、集客数としては下位に沈んでいる。それでも、名古屋については、戦後復興の中、戦前以来の観光ポイントである東山動物園などに加えて、新たに充実したスポーツ施設と産業都市名古屋に対応する産業・工場の見学をおしだしている。以上は、修学旅行の見学先についての鳥瞰にとどまっており、あらためて、愛知・名古屋をめぐる観光旅行について、歴史的に見ることが必要となっている。

本稿では、愛知県が２０２２年で発足１５０周年となることもあり、日本の近代史がそうであったように、愛知県も前半生の７５年は戦争に終始した時代であり、愛知県も、名古屋市、名古屋商工会議所と連携して「軍国設計」の国策（吉田光邦）に対応することとなる。特に、時代を映す鏡、社会経済を映す鏡とも言われる観光の時代的な変化を通して検討することは有効と思われる。ここでは、主に愛知県、名古屋市、そして名古屋鉄道局、名古屋鉄道など観光旅行の組織化にかかわった諸機関の各種旅行案内を通じて明らかにしようと思う。特に、日中戦争から日米開戦以降の戦時期とそれ以前の時期の観光旅行を対比しつつ検討する。

一、日中戦争以前の観光旅行

本格的な戦争の時代となる日中戦争以前について見ると、写真１は、愛知県庁も名古屋市役所も広小路通り栄町辺りにあった時代のものであり、昭和初期の事情が知られるものである。この「日本名所巡遊」の対象となる名古屋の名所は、名古屋の北部にある名古屋城と、その郭内の練兵場、歩兵第六連隊、そして第三師団司令部が目立っている。大須観音、七つ

写真１:「令女界第九巻第十号附録　日本名所巡遊　７　名古屋附近　長良川・日本ライン」、１９３０年。

寺、東別院本願寺、熱田神宮などの寺社、第一中学校、第一師範学校の学校も記されているが、やはり、名古屋機器製造所、造兵廠名古屋工廠という国営の軍需工場、愛知時計電機、三菱内燃機という航空機工場、そして豊田紡織工場、東洋紡績愛知分工場、名古屋紡績工場、内外紡績工場、日清紡績という紡織工場も描かれている。産業都市名古屋が観光の押し出しとなっている。

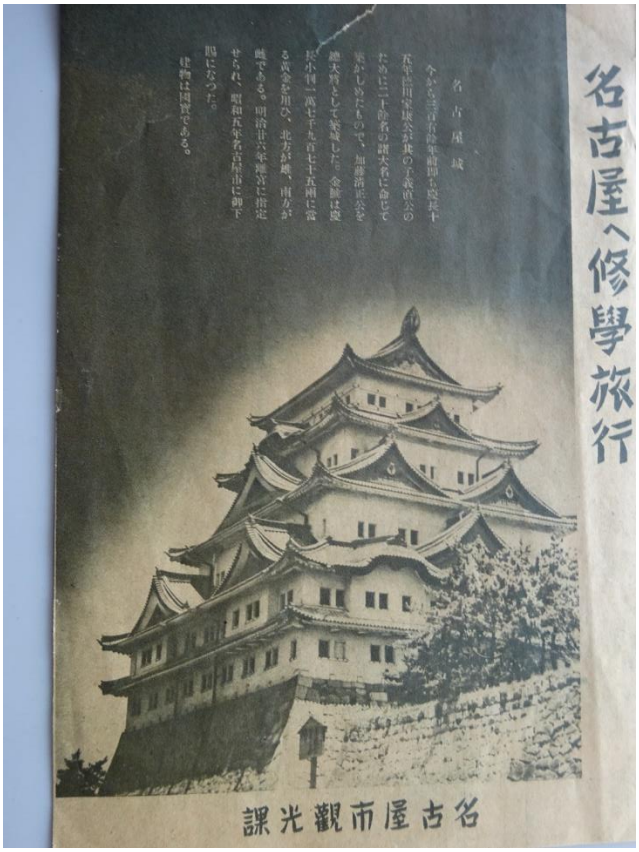


写真２：『名古屋へ修学旅行』名古屋市観光課、１９３７年頃。

戦前、観光旅行先としての名古屋については、名古屋市の作成した写真２の『名古屋へ修学旅行』（名古屋市観光課、１９３７年頃）で見ると、まず、名古屋城があげられている。「明治廿六年離宮に指定せられ、昭和五年名古屋市に御下賜になった」こと、建物は国宝であることを強調している。さらに、熱田神宮、東山植物園の大温室、東山動物園をあげ、１９３７年に開園する東山植物園・東山動物園については「その誇りとするところは、大岩壁を脊景として数頭のライオンが放飼せられ、濠を隔てゝ観覧客に自然の原野に於ける生態を観察せしめむとするものである」ことであり、「これが本動物園の誇りである」とする。更に、名古屋の名所として本邦第四位の貿易港である名古屋港が第四期工事を完了したことをあげている。名古屋港は第四期工事によって「一萬噸級の船舶が潮位に関係なく自由に出入り」できるものとなる（『港湾と愛知県』港湾協会第十回通常総会愛知準備委員会、１

９３７年)。そして、鶴舞公園、覚王山奉安塔、徳川美術館をあげた後、「演芸場活動常設館其他の娯楽機関が軒を並べ市の一大歓楽境である」大須観音、「名古屋の中央を東西に貫いた大道路で、商店軒を並べ、銀行、会社、大商店櫛比四時昼夜の盛り場である」広小路通りを紹介し、特に修学旅行案内ということで、市電は団体割引として中等学校以下学校生徒児童（３０人以上）の割引、名古屋城と東山動物園については、「中等学校生徒ニシテ職員ノ引率スル団体」についての割引となっている（『名古屋へ修学旅行』名古屋市観光課、１９３７年頃)。

写真３：大須観音門前通り　　写真４：広小路通り

一般向けの観光案内においても、名古屋については「旅行者に、懐しく待たるゝは金鯱に輝く産業大都名古屋市」であり、「窓外遙か数里の遠望より金鯱城の雄姿は神さびたる熱田神宮の森と共に旅行者に敬虔の念を与え、その地に育まれる名古屋市の象徴たる煙雲の棚引く姿は名古屋市来訪者の印象深い情景である」とする。名古屋は「青年産業都市の意気を見せているが金の鯱鉾で名のある名城を有しその城下街が生んだ幾多の名勝旧跡に充ちた観光名古屋の姿を忘れてはならない」というように観光名古屋を強調する。具体的に挙げられているのは、やはり、「その建築美術の精華として内外人の絶賛の的にして、国宝中比類なき」「名古屋市民の誇りたる」名古屋城、その付近の第三師団司令部、名古屋市庁、招魂社（１９３５年完成)、その東門が「特別建造物に指定されている」熱田神宮、日暹寺のある覚王山、「丘陵地帯二十四萬坪」の東山公園、「四季桃、桜、紅葉の景勝地として興楽の中心地である」八事山、「全国有数の欧風式公園」の鶴舞公園、「鶴舞公園と異なり純日本式の」中村公園、「名古屋人及近郷の善男善女」が「ゴボーサンと敬称し、敬神の中心となっている」東本願寺別院と西本願寺別院、「その貿易額に於いて昭和九年度二億円を優に突破し、本邦第四位の貿易港として厳然たる地位を保持している」名古屋港、「八千三百九米の大運河」の中川運河、「名古屋港拾号地」に建設され「近代都市名古屋を航空界にもデビューせしめた」名古屋飛行場、「大衆的特色ある娯楽街をなす」大須観音及び附近盛場、「商業中心地大ビルデイング櫛比し同時にカフェー、飲食店、映画館等に富」み、「漫歩、買物街であ

写真５：「名古屋観光ホテルのおすゝめ」１９３７年頃。

る処、東京の銀座及丸の内を思わせる」広小路通りと続いている。いかにも、名古屋商工会議所らしい紹介となっている。併せて、「加之名古屋は附近に知多の景勝地、日本ライン、伊勢、木曽路の名勝地をひかえ変化に富む山水に囲繞せられたる絶好の日本中部景勝地である」としている（『名古屋観光案内』名古屋商工会議所内名古屋観光協会、１９３５年頃、旧名鉄資料館所蔵）。

名古屋からする「日本中部景勝地」については、写真５の１９３６年に開業した名古屋観光ホテルがお勧めする観光地の案内によりその広がりが知られる。名古屋観光ホテルは、１９３７年に開催される名古屋汎太平洋平和博覧会の開催に向けての都市施設整備として進められた名古屋飛行場、桜通、新名古屋駅の建設と並ぶものであった。特に、名古屋観光ホテルは、１９３０年に設置された国際観光局による外貨獲得策の一環をなす国際観光ホテル建設の一つとなったことで、１９３５年には国際観光ホテル建設資金を大蔵省預金部資金より１３０万円の融通を受けて、建設されたものであった。その建設は名古屋市と名古屋商工会議所によって推進された（『新修名古屋市史　資料編　近代３』２０１４年）。名古屋観光ホテルを拠点として、愛知県・岐阜県・三重県の東海三県だけでなく、静岡県や奈良県、和歌山県、そして福井県まで広げての観光地について案内している。愛知県内としては名鉄沿線の犬山日本ライン、入鹿池、東山動物園、覚王山、名古屋城、瀬戸（陶磁器）、豊川稲荷、和合ゴルフリンク、熱田神宮、名鉄沿線の新舞子（海水浴場）、常滑、半田、内海（サンドスキー）、師崎、篠島、伊良湖岬、蒲郡（茶畑）が記されている。なお、この名古屋汎太平洋平和博覧会では、「観光館・観光街」の特設館も開設され、「風光と史実に輝く観光日本と太平洋沿岸諸国の風物を一堂に展示すると共に絢爛たる殿堂式観光街を附帯させ居ながらにして天下の名勝を巡歴せしめ」たという（「名古屋汎太平洋平和博覧会の栞」名鉄電車、１９３７年頃）。

写真６：絵葉書「名古屋汎太平洋平和博覧会　観光館」、１９３７年頃。

二、日中戦争後の観光旅行

日中戦争開始以降、各地の観光地はどのように対応したのであろうか。温泉地として日本有数の別府温泉においては、日中戦争本格化による国民精神総動員運動の開始に対応して、「国民精神総動員観光報国」をスローガンに、「優秀なる特質をもつ温泉場を包含した大別府温泉は、理想的に遊覧と療養の二ツの条件を兼ねているものであり、非常時局の要求する保健と療養の温泉地としても、戦傷による療病者」に対して「温泉療法によって、著しく療養期間を短縮せしめる等全国無比の温泉報国都市を築いている」というように、観光報国・温泉報国を推進しつつも別府・温泉場への集客の拡大をおしすすめる（『保健と別府』別府市観光課、１９３８年）。

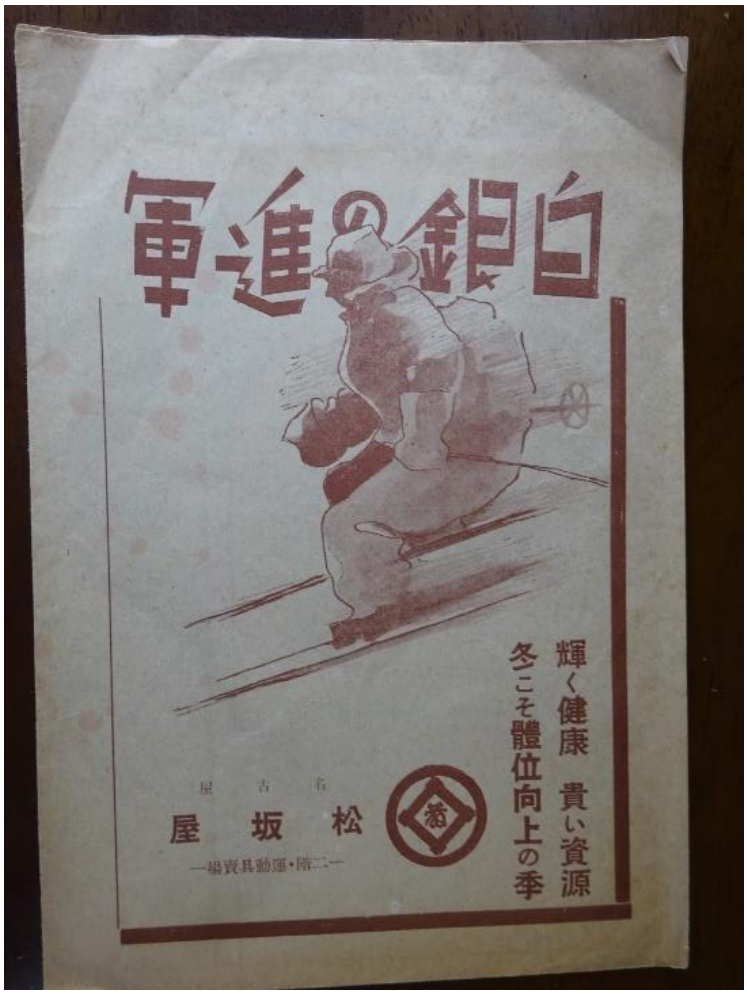


写真７：「冬の鍛錬道場　中部日本スキー（スケート）地調」松坂屋、１９３９年。

しかし、この時期の中心は写真７にあるように「体位向上」の推進にあった。もともと、「登山やハイキングと共にウインター・スポーツとしてのスキー、スケートは近来益々旺ん

なって」いた時に、「今や世は挙げて非常時である。北支に、江南に勇戦奮闘する皇軍将士を思う時、国民は一人として安閑と時を過ごすことは出来ない」として、「茲に私共は従来のスキーに対する宣伝政策を再検討せざるを得ない状態に立ち至った」として、「スキーの本然の姿は心身の鍛錬に在る。厳冬酷寒を衝いて戸外に進出し体力を錬磨し忍耐力を養う。体位向上、堅忍持久の精神期してまつべきであろう」となる（『体位向上銃後の備へ　国民精神総動員』東京鉄道局、年次不明）。

日中戦争以前には、例えば、「本邦第一の多数のスキー客」を迎えていた長野県「上諏訪町郊外霧ヶ峰スキー場」は「１９３４―３５年のスキーシーズンの〔鉄道〕省営バス利用者は４万８０７７人に達し、外に貸切自動車・徒歩者を合算するときは夥しい数に上」っていたという。同様に「諏訪のスケート」についても「霧ヶ峰スキー場出現によって冬の交通が容易」となったことで、「冬の運動都市」諏訪の集客の柱の一つとなる。「夏から秋にかけての霧ヶ峰緑地」はハイキングの好適地というように、山野はスキー・スケート、ハイキング、「これ等は単にスポーツとしての体育の向上を庶幾するのみならず、これによって一脈清新の気を注入し、明朗・果敢・剛毅・不撓の精神涵養を期待し得る」とその効果を強調する（上田貢『山郷の諏訪　霧ヶ峰・ハイキング　諏訪湖：温泉』飯島書店、１９３５年）。

それが日中戦争以降、一転して「今や長期建設の秋、国を挙げて人的資源の強化を図る時スキーの普及発達こそ冬期雪国の国民の身心鍛錬に最適なばかりでなく、軍事的にも重要な意義を持つことを自覚し、よりスキーの普及発達を図らねばならぬのではなかろうか」ということとなる（札幌鉄道局『スキー北海道』１９３８年）。

観光旅行自体も聖地参拝として推奨されることとなる。１９４０年、紀元二千六百年には聖地参拝を、となる。「全国より伊勢、大和の聖地めざして参集する旅客は未曽有の大多数に上ることが予想される」ことで、「鉄道省では関係交通機関と連絡を計り、現下輸送難の非常時にも拘わらず、聖地参拝を志す国民的冀望を充たすべく、別項の通り聖地参拝団体特別取扱方及び個人客に対する聖地参拝券の両制度を設けて、輸送の完遂を期する一面旅客の便宜を計ることとなった」という（『聖地参拝案内』名古屋鉄道局、１９４０年）。写真８にあるように、「奉祝紀元二六〇〇年」ということで、名古屋地方観光案内も樫原神宮、伊勢大神宮とともに、愛知県内の熱田神宮、大須七ツ寺、豊川稲荷が大きく記されている。とはいえ、「躍進の産業都市名古屋」「樫原神宮より名古屋へ」と銘うって、名古屋城、東山動物園、東山植物園の観光を押し出している。市内観光のルート設定も「三時間のコース」「五時間のコース」「一日のコース」「夜の二時間コース」と細かい。参拝と観光はまだ、一体の様であった。東山動物園の観覧時間が季節によって異なっていたことも併せて知られる。一、二月は午前九時から午後四時まで、三月、四月は午前八時三十分から午後五時まで、五月から八月までは、午前八時から午後六時まで、九月、十月は午前八時三十分から午後五時まで、十一月、十二月までは午前九時から午後四時までとなっている。東山植物園（温室）の開園時間も同様であった（『名古屋へ　奉祝二六〇〇年』名古屋観光案内協会）。写真９のように１９４１には、「聖地巡拝」、「大阪・京都・名古屋各駅より急行三〇分毎発車」というよう

に、聖地に駆り立てることとなる。

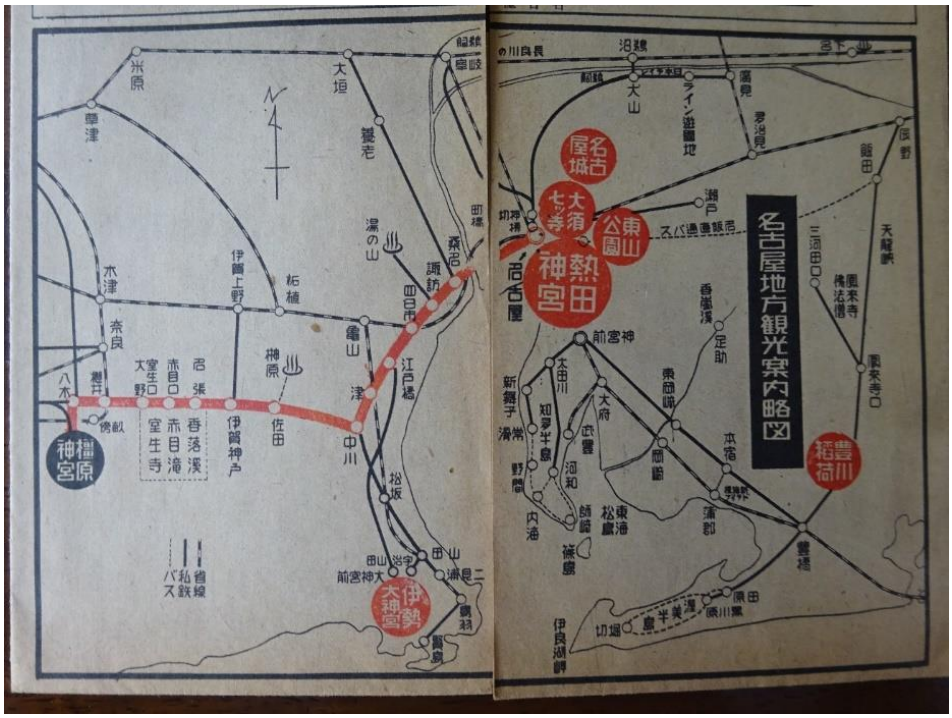


写真８：「名古屋地方観光案内略図」『名古屋へ　奉祝二六〇〇年』名古屋観光案内協会。

写真９：名古屋鉄道局編纂『東海道線　車窓展望―（改訂版）―』社団法人東亜旅行社、１９４１年、の広告。

三、旅行の制限と徒歩錬成

国民精神総動員運動は、「青年徒歩旅行」の組織化もおしすすめる。関連するハイキングは「昭和９年頃から」「都会の人々の話題に上る様になり」「僅か一二年のうちにハイキング熱は澎湃として高まり」、１９３８年頃にも「旅行は未曽有の健脚黄金時代を現出して居る」と言われていた中での青年徒歩旅行であった。「ハイキングは、山野を跋渉するという点で今回の青年徒歩旅行と似ているが、従来のハイキングは、稍もすれば精神的訓練の方面が等閑視されがちで、国民精神訓練の糧とするには物足りない感が深いのである」ということで、「斯く迄発達した国民大衆の徒歩旅行を国民精神総動員の国策に対応せしめ、新しい国策として活用せんが為に」、青年徒歩旅行を提唱したという。その内容は「青少年に祖国を正しく認識させ志操の涵養及び心身の鍛錬をする機会を与え、それと同時に一定の宿泊所で共同生活をして質実剛健の気風を養い、自治、協同、奉仕の精神を修養させようとするもので」あった（『青年徒歩旅行　祖国認識心身鍛錬』鉄道省、１９３８年）。

同時に青少年に対しては、「体力章検定」が実施される。名古屋市においても「中等学校、実業学校並ニ青年学校生徒ニ厚生省制定ノ体力章検定ヲ実施スルト共ニ、本年度〔昭和１５年度〕ヨリハ新シク学童体力章検定ノ制度ヲ定メテ尋常五年以上ノ男女学童ニモコレヲ実施スルコトニシタ」（「名古屋市ニ於ケル学校体育施設ト其ノ影響　教職員体育施設ト其ノ影響（昭和十五年十一月調）」『昭和十五年度　内務省行政及財政監査調査書類　総務局総務課』名古屋市市政資料館所蔵）。

実際、中川区では、「昭和十五年十二月一日　中川区体力章検定」を実施している（『昭和十五年度　歳出簿（一）』名古屋市市政資料館所蔵）。

昭和１８年１１月１８日には「昭和十八年度女子体力章検定大会」を「愛知県女子師範学校校庭ニ於テ実施」している（『昭和１８年１月　往復文書綴　土木局』名古屋市市政資料館所蔵）。その「昭和十八年度女子体力章検定大会要綱」では、「決戦下彌々国民総力ヲ発揮スベキ秋、普ク銃後女子青少年ヲシテ自己体力ノ現状竝ニ国民体育ノ本義ニ関スル認識ヲ深カラシムルト共ニ体育運動ニ対スル関心ト興味ヲ喚起シ自ラ進ンデ之ヲ日常生活ノ中ニ織込マシメ健康ナル母体タルベキ女子青少年ノ体力向上ヲ図リ以テ国力ノ根基ヲ培養セントス」。受験資格は「数へ十五歳ヨリ二十一歳迄ノ女子　但シ希望ニヨリ二十二歳以上ノ者モ受験スルコトヲ得」るとしている。検定種目は、「千米　縄跳　短棒投　運搬一六瓩一〇〇米（五〇米折返）　体操」であり、それぞれ「上級〔運搬で見ると２４秒以内〕中級〔２６秒以内〕初級〔２９秒以内〕級外〔３５秒以内〕」となっている」（『昭和１８年１月　往復文書綴　土木局』名古屋市市政資料館所蔵）。

男子についても、１９４４年頃に愛知県田口農林学校で実施されたものを見ると、「男子体育章検定手榴弾重量変更」として、同校は手榴弾三箇を購入している（『昭和十九年度　発送文書綴　愛知県田口農林学校』愛知県公文書館所蔵）。体力章のことと思われるが、同校の記録によれば、授与される体力章（写真１０参照）については次の通りであった。

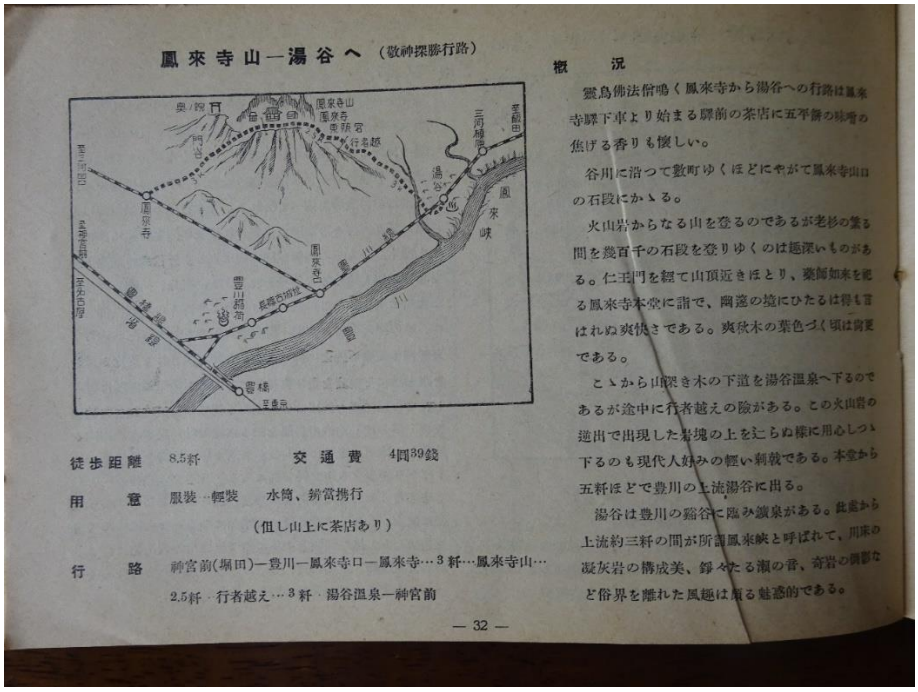
「体力章ノ中央ノ鏡ハ皇国ノ八紘ノ為宇ノ精神ヲ現ス　四方ニ向ツタ矢形ト色調ハ東西南北ノ四神タル東青龍（青）西白虎（白）北玄武（黒）南朱雀（赤）を表象ス　進行形ノ矢形ハ強靭敏速力ヲ表現シ又国民体力ト気力ヲ表現シタルモノニシテ矢形ト鏡ノ五色ハ体力章検定ノ五種目即チ疾走力、跳躍力、懸垂力、投擲力、運搬力ノ調和的発達ヲ意見ス」(『昭和十七年度　受付文書綴　愛知県田口農林学校』愛知県公文書館所蔵)。説明内容は写真１０とはやや異なるが、「疾走力、跳躍力、懸垂力、投擲力、運搬力ノ調和的発達」が求められており、青少年の目指すべき目標とされたのである。

写真１０：名古屋鉄道局編纂『心身鍛錬　山野跋渉の栞―名古屋中心―』社団法人東亜旅行社、１９４２年、名鉄電車広告。

以上の青少年の鍛錬に対して、庶民の徒歩旅行は、「戦争の長期化に伴い、銃後国民の堅実なる志操の涵養と旺盛な体力の確保が国家的要請となって参った今日、私達は一層質実剛健、如何なる困苦にも打ち克つべき鉄石の心身鍛錬に努めねばならぬのであります」と銘うつも、「時局と共に急速に膨張してきました人口の都市集中は大都市をして不健康な空気と雑とうと騒音の巷と化し、反自然的な生活を餘儀なくされて居ります。徒歩錬成の旅行はかゝる都塵を避けて、澄み切った青空の下、土に親しみ、新鮮なる大気を呼吸し山野を跋渉し、或は史蹟名勝、醇風美俗の地を訪れて豊かな情操を培うと共に、行軍力の養成にも効果の大きいものがあるのであります。明日の生産力拡充の新しい力の培養に、銃後生活の明朗健全化に寄與する質実剛健の旅」が必要とする。「産業都市名古屋を中心とする徒歩行路」

が案内される。以下の写真１１、１２が「徒歩錬成」の一例である。

写真１１：写真１０に同じ。



鳳來寺山—湯谷へ（敬神探勝行路）

徒歩距離　8.5粁　　交通費　4圓39錢

用意　服裝…輕裝　水筒、雨具携行

（但し山上に茶店あり）

行路　神宮前(堀田)—豊川—鳳來寺口—鳳來寺…3粁…鳳來寺山…2.5粁…行者越え…3粁…湯谷温泉—神宮前

概況

靈鳥佛法僧鳴く鳳來寺から湯谷への行路は鳳來寺驛下車より始まる驛前の茶店に五平餅の味噌の焦げる香りも懷しい。

谷川に沿つて數町ゆくほどにやがて鳳來寺山口の石段にかゝる。

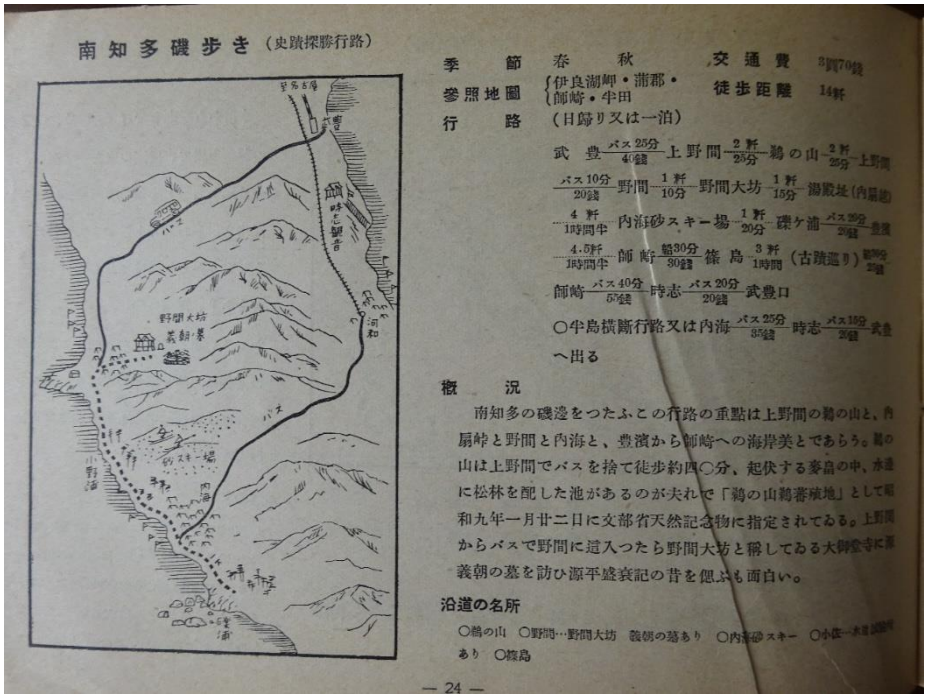
火山岩からなる山を登るのであるが老杉の繁る間を幾百千の石段を登りゆくのは趣深いものがある。仁王門を經て山頂近きほとり、藥師如來を祀る鳳來寺本堂に詣で、幽邃の境にひたるは得も言はれぬ爽快さである。爽秋木の葉色づく頃は尙更である。

こゝから山深き木の下道を湯谷温泉へ下るのであるが途中に行者越えの險がある。この火山岩の迸出で出現した岩塊の上を辷らぬ樣に用心しつゝ下るのも現代人好みの輕い刺戟である。本堂から五粁ほどで豊川の上流湯谷に出る。

湯谷は豊川の谿谷に臨み鑛泉がある。此處から上流約三粁の間が所謂鳳來峽と呼ばれて、川床の凝灰岩の構成美、錚々たる瀬の音、奇岩の側影など俗界を離れた風趣は頗る魅惑的である。

— 32 —

写真１２：写真１０に同じ。



南知多磯歩き（史蹟探勝行路）

季節　春　秋　交通費　3圓70錢

参照地圖　伊良湖岬・渥郡・師崎・半田　徒歩距離　14粁

行路　（日歸リ又は一泊）

武豊 —バス 25分/40錢— 上野間 —2粁/25分— 鵜の山 —2粁/25分— 上野間 —バス 10分/20錢— 野間 —1粁/10分— 野間大坊 —1粁/15分— 湯殿堤（内扇峠） —4粁/1時間半— 内海砂スキー場 —1粁/20分— 碑ケ浦 —バス 25分/20錢— 豊濱 —4.5粁/1時間半— 師崎 —船 30分/30錢— 篠島 —3粁/1時間（古蹟巡り）— 師崎 —バス 40分/50錢— 時志 —バス 20分/20錢— 武豊口

○半島横斷行路又は内海 —バス 25分/35錢— 時志 —バス 15分/20錢— 武豊へ出る

概況

南知多の磯邊をつたふこの行路の重點は上野間の鵜の山と、内扇峠と野間と内海と、豊濱から師崎への海岸美とであらう。鵜の山は上野間でバスを捨て徒歩約四〇分、起伏する叢島の中、水邊に松林を配した池があるのが夫れで「鵜の山鵜蒼碑地」として昭和九年一月廿二日に文部省天然記念物に指定されてゐる。上野間からバスで野間に這入つたら野間大坊と稱してゐる大御堂寺に源義朝の墓を訪ひ源平盛衰記の昔を偲ぶも面白い。

沿道の名所

○鵜の山　○野間…野間大坊　義朝の墓あり　○内海砂スキー　○小佐…水道[illegible]あり　○篠島

— 24 —

写真１３：写真１０に同じ。

いずれにしても「不要不急の旅行を慎む風潮のなかで、海水浴やハイクキングにおいては国民の体力強化、健康増進のような目的が、そして参詣においては国運隆盛祈願のような目的が前面に押し出されていった」のである（杉山里枝「第五章　戦間・戦時期私鉄の観光事業の展開」千住一・老川慶喜編著『帝国日本の観光』日本経済評論社、２０２２年）。

以上のような徒歩旅行が案内された背景には戦時下の鉄道事情があった。観光旅行に対する制限要求について見ると、１９４１年７月には、愛知県から県内各学校に以下のような「旅行抑制」の指示が出される。

「時局下鉄道ノ輸送輻輳ノ処今夏ハ得ニ輸送逼迫ノ状況ニ付今夏各学校ノ教職員及生徒児童ノ旅行及会合ニ付テハ左記ニ依リ措置相成度此段及通牒

記

一　各府県又ハ各道府県ノ各種団体等ノ主催ニ係ル全国的又ハ数道府県ニ亘ル各種大会、講習後ノ総会其ノ他ノ会合ハ当分ノ間之ヲ延期シ其間ニ付指示ナキトキハ中止ト相成リタルコト

其ノ他ノモノノ主催ニ係ル同種ノ会合ニ対シテハ本省ニ於テ指示スルモノノ外教職員及生徒児童ヲシテ参加セシメサルコト

一　本年度ニ於テハ師範学校、中等学校、青年学校及国民学校等ニ在リテハ総テ七月三十一日迄通学セシメ授業鍛錬等ヲ為サシムルコト

一　県外ニ亘ル教職員及生徒児童ノ団体旅行ハ時ニ指示スルモノノ外当分ノ間之ヲ中止又ハ延期スルコト」（『昭和十六年度　文書受附綴』愛知県田口農林学校、愛知県公文

書館所蔵)。

この後、１９４２年１１月１４日「戦争の激化で旅行制限はじまる」、同年１１月１５日「関門トンネルの開通と戦時非常体制の実施で列車を増発、急行列車のスピードダウン」、１９４４年4月1日「決戦非常措置として１等車、寝台車、食堂車等の全廃と急行列車の削減」と続く（「鉄道１００年　鉄道略年表」名古屋鉄道管理局、１９７２年頃)。

国内だけでなく、海外、満州・中国に対しても、既に、１９４０年5月に「渡支者は中国の新秩序建設に直接且つ積極的に協力を必要とするものに限られ、不要不急の一般旅行者又はその他の理由によるものも、緊急や止むを得ざるものと認められたものゝ外は、厳重に制限されて」いたのであるが（東亜旅行社編『旅と税関』東亜旅行社満州支部、１９４２年)、１９４３年4月には、鉄道事情からする満州旅行制限が、愛知県から県内の各県立学校長、昭和塾堂長、教員保養所長宛に指示が出される。それは、次のような政府からの指示によるものであった。

「昭和十八年四月五日

大東亜次官　山本熊一

内務次官　山崎　巌殿

満州国内旅行制限ニ関スル件

満州国ニ於テハ今般輸送能力逼迫ニ伴ヒ左記ノ通極力旅行ノ制限ヲ行フコトト相成タルニ付キ日本側ニ於テモ之ニ協力セラレタキ旨申越有之タルニ付テハ貴方ニ於テモ之ニ即応シ其ノ趣旨徹底実現方可然御取計相煩儀

記

一、会議、視察、連絡等ノ為ニ国外ヨリ関係者ノ招致竝ニ同様国外ヘノ出張ハ慎ニ止ムヲ得サルモノノミニ極限スルコト

二、間接的業務連絡ニハ儀礼的行事其ノ他文書電報等ニテ処理可能ノ事務旅行ヲ認メサルコトトシ各種報道機関ノ利用等ニ依リ之ガ徹底ニ遺憾ナカラシムル」（『昭和十八年度　文書受附綴』愛知県田口農林学校、愛知県公文書館所蔵）

「満州国」の「輸送能力逼迫」により、「会議、視察、連絡等」のようなとても観光旅行とも思えないような旅行までも制限されたことが知られる。１９４３年頃は「船が不足し、海運物資が鉄道に回ってきたので、旅客列車の削減によって機関車を捻出し、貨物輸送を増強する必要が生じた」時期であった。この後、「鉄道は日々増大する戦時物資の輸送要請に追われていった。この貨物をさばくため、旅客列車は次第に削減され、輸送の片隅へと追いやられた」結果、１９４４年１０月１１日には、特急も廃止となる。観光旅行は、もともと不要不急の旅行は自粛の中困難になっていたとはいえ、遠方への観光旅行の条件も失われ、１９４５年3月には、急行列車がほぼ廃止となり、「旅客列車は通勤利用区間だけ残して、直通列車も至る所でぶち切られる」こととなる（交通新聞編集局編『特急物語　東海道線の今昔』財団法人交通協力会、１９５８年)。写真１４からも、戦時末期の貨物車輛確保運行優先による、矢継ぎ早の客車運行間引きの状況が知られる。

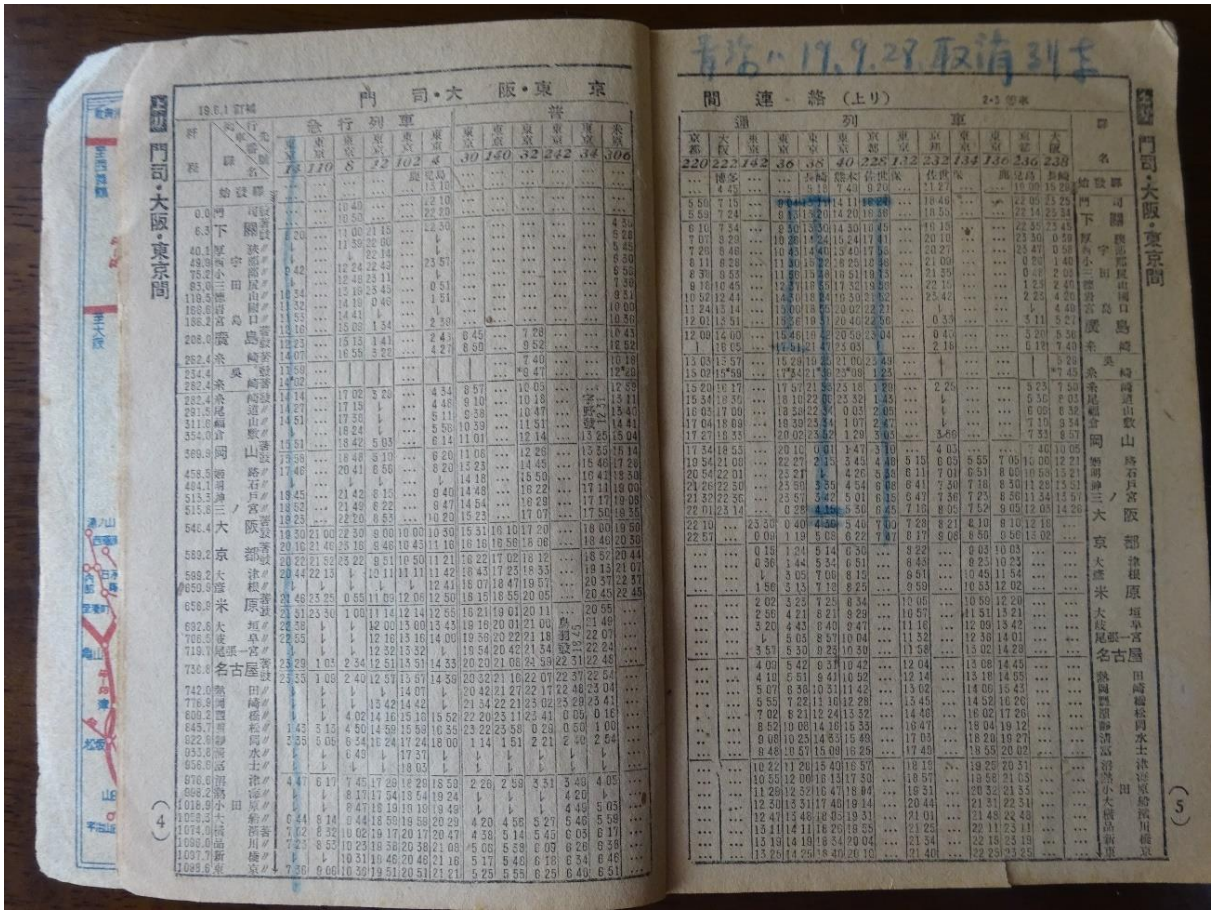


写真１４：『時刻表　関東・中部地方』財団法人東亜交通公社、昭和十九年七月。「青線ハ19.9.28.取消列車」の書き込みあり。

四、戦後のアメリカ駐留軍向けの観光案内

写真１５は Welcome to NAGOYA AIR BASE WHAT TO SEE WHERE TO GO Entertainment and Recreation Guide Map of Nagoya（名古屋市市政資料館所蔵）に収録された名古屋市内地図であるが、同書は、１９４６年に、小牧の名古屋空軍基地に東京から移駐してきた米軍第五航空部が、１９５１年のサンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約の締結により、占領終了後も引き続きアメリカ駐留軍として小牧空軍基地を拠点として活動することになったことから、同書の発行者である Nagoya Air Base Information Office and Special Services が航空部の隊員向けに１９５５年に発行したブックレットである。名古屋市内の娯楽及び遊園施設に関する案内だけでなく、日々の生活に必要なパスポートに関することや病院、学校、金融機関などに関する情報が記されている。案内のなかでは、食中毒についても警戒を促している。例えば、食べ物は、必ず、洗って、火を通して、消毒することなどをキノコや魚介類について必ずおこなうことや、冷蔵庫から出した乳製品やハムなどについても調理する前や調理後の３０分や６０分以上はそのままにしないことなどのように、ばい菌への細心の注意を促している。

観光案内については、敗戦後、占領下の駐留軍が享受してきた各種の観光旅行の案内を集約したものと考えられる。特に、同書の巻末に収録されている、Sight Seeing Map of Aichi Prefectural Parks 愛知県立公園の観光地図が注目される（写真１６－１、１６－２）。愛知県の県立公園指定は１９５１年であり（日本商工会議所編『観光概観　１９６２－３』日本商工会議所、１９６２年)、同地図にも、指定された県立公園である北設山岳県立公園、鳳来寺山県立公園、犬山県立公園、玉野川県立公園、加茂県立公園、南知多県立公園、渥美半島県立公園が紹介されている。愛知県の自然景観がアメリカ駐留軍向けに案内されているのである。例えば、渥美半島県立公園については、「終戦迄軍の試砲場として黒いベールに包まれておりました渥美半島は、戦後一般に開放されるやそのすぐれた景観は人々の注視を浴び、年ごとに訪れる人々も多くなっております」と記されるように（『黒潮おどる　南の海』名鉄電車推薦旅館連盟（南知多・三河・渥美地区)、年次不明、１９５４年以降)、戦後一転して観光地として賑わうこととなる。愛知県立公園はアメリカ駐留軍にも案内され、知れ渡ることからすると、自然景観に富んだ愛知県観光というコースはこの時代のメジャーな県内観光であったことが知られる。

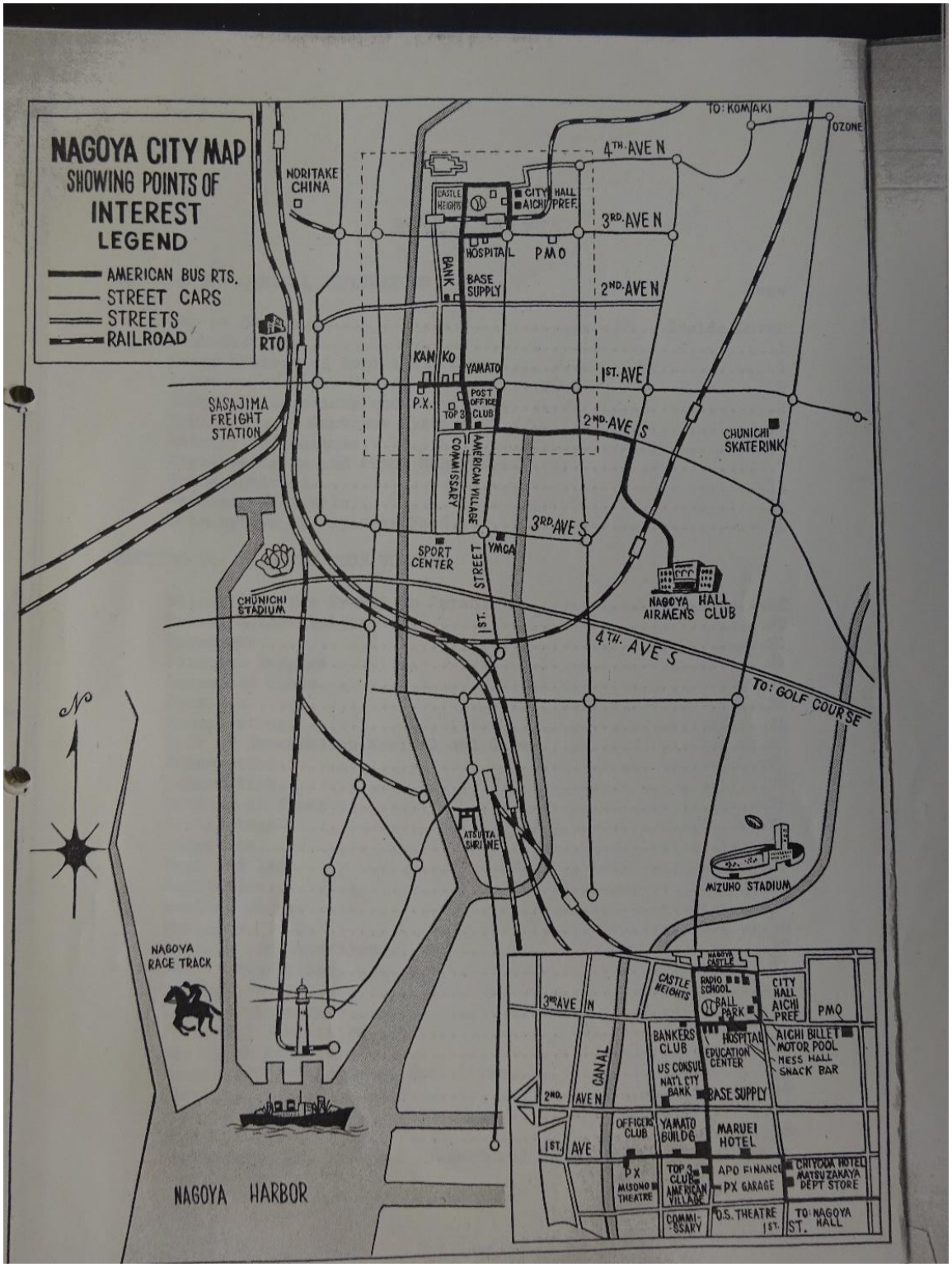


写真１５：Welcome to NAGOYA AIR BASE WHAT TO SEE WHERE TO GO Entertainment and Recreation Guide Map of Nagoya, Nagoya Air Base Information Office and Special Services, １９５５.

写真１６ －１：写真１５に同じ。

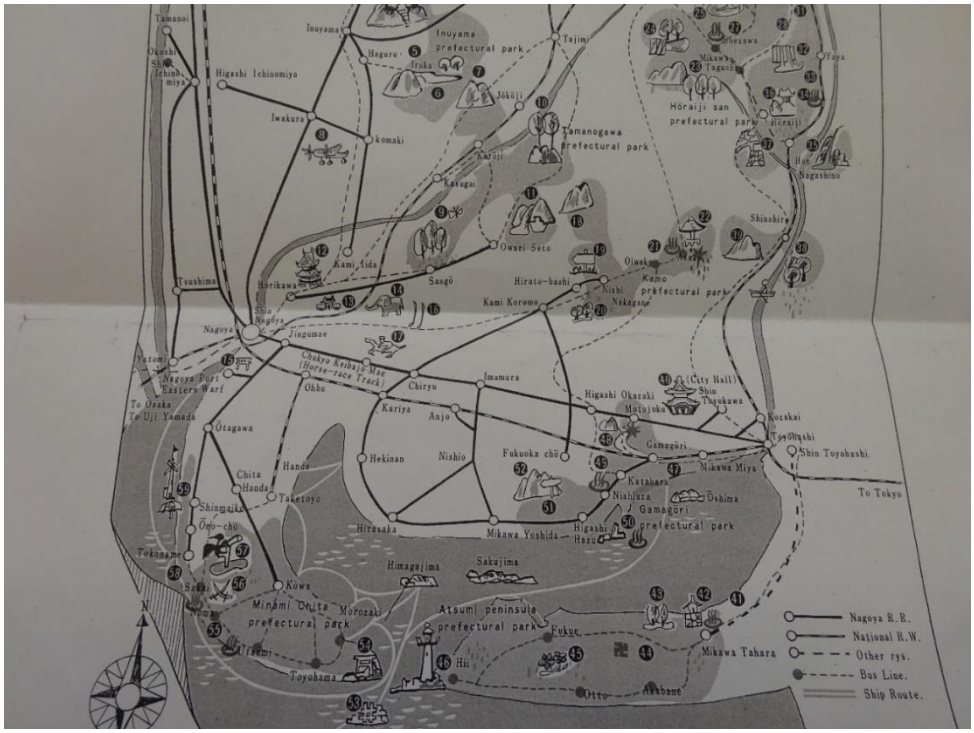


写真１６－２：写真１５に同じ。